

# 南アフリカ大陸滞在記

外国語学部  
中国語学科3年

志賀 雄太

アフリカ大陸に行くとした理由は、日本にはない大自然。また、未知なる出会いや、様々な好奇心からである。あとは、ノリである。日本の裏側に位置し、日本から1日半も移動時間がかかるこの土地で、何も得られないで帰ってくるほうが難しいくらいに、日本とは考え方、行動、あいさつ、なにからなにまで違っていた。

## 南アフリカの恐怖

まず、空港はヨハネスブルグに到着する。しかしここは世界最悪と言われるほどの治安の悪さである。1人で行動など本当に自殺しに行くのと同然らしい。後にガイドの方に聞いた話だが、毎日死者は40人に達する計算らしい。さらに日本ではありえない殺人事件のお話をたくさん聞かされた。ヨハネスブルグに降りて街を歩くには、最低

3人の男性と、地元のガイドが知り合いをつけなければ、旅行者は必ず標的にされるらしい。

僕は、そこからプレトリアという場所に移動した。タクシーで行ったが、白人だったことにびっくりしたし、さらにプレトリアについても、いたるところに白人が歩いていたり、お店を経営したりしていて、アフリカをまったく感じさせない土地だった。町並みも、大自然アフリカというよりは、わかりやすく言うところ台北や、バンコクなどの道が広いバージョンである。普通に不自由を感じさせない暮らしができる場所である。しかし、睨んでくる奴や、怪しい雰囲気



写真はプレトリアで出会った日本人とフィリピン人が経営しているホテルで撮った一枚。

気をしている人はそこらじゅうにいた。なので、いつも気を引き締めて旅をした記憶がある。

ケープタウンへ行くため、空港で聞いた情報を頼りにここから出ている夜行バスへ乗り込んだ。その時、事件が起きた。俺のバッグが狙われたのだ。日本と一緒に、荷物は下の所に載せる。この時、荷物を運転手に託さなければならない。運転手は客をみんな乗せた後に1人で荷物をバスに押し込むのだ。俺は窓側だったのでその様子を見ていた。すると、男4人組が歩きながらやってきた。運転手となにやら雑談しているような感じだった。すると1人がいきなりバッグを持ち出そうとした。そう、そのバッグが俺のである。俺は「はい、はい」と叫びながらバスを降りた。見ていてくれた乗客の何人かも降りてきてくれた。幸い、何がしたかったのか意味がわからない4人組で助

## 南アフリカ大陸滞在記

かったものの、夜ということもありやはり相当怖かった。アドレナリンが出すぎて、バスの中では少しも休めなかった。今考えると、1000人に1人くらいの貴重な体験である。

## 国際都市、ケープタウン

ケープタウンになんとか到着。いやーリゾートっていうか、普通に栄えてる。とても暮らしやすそうな街である。俺の目的はテーブルマウンテンと喜望峰である、完全に観光だ。

その前に、とりあえずホテル探してテキトーに過ごして1泊した。ケープタウンは旅行が好きなら絶対にお勧めする場所である。最近また治安の悪さが指摘されているようだが、俺は身の危険を感じるような出来事は起こらなかった。むしろ、海外の観光客が多いせいか、街全体がとても国際交流歓迎的な雰囲気であり、俺が感動したことは、ホテルで1泊したが、最初渡された部屋番号に行こうとした時、フロントの姉ちゃんがWAIIT!!と言った。部屋番号札を交換させられた。んまっいつかと思って部屋に入った瞬間、窓の向こうには巨大な岩壁。テーブル



ケープタウン：テーブルマウンテン

ルマウンテンである。まさか、あの姉ちゃんはこのために。おれは初めて黒人に恋をした。そういえば、プレトリアから気になっていたことだが、トイレの小便器、位置高すぎ。毎回背伸び。やつぱ足の長さが全然違うらしい。

## テーブルマウンテン

ケープタウンにいた瞬間からテーブルマウンテンはどこからでも遠くに見ることができ、目の前で見るとやはり迫力が全然違う。ほんとに、どうしてこの平坦な場所にいきなり岩が聳え立つように出来たのかただただ疑問だった。頂上までの行き方はロープウェイかハイキング。俺はハイキングを選んだ。旅人には当然の選択であろう。しかし、急な岩山、相当つらい。ほぼ崖なのだから。4時間くらいかな？頂上到着。



テーブルマウンテン頂上からの景色

人がいっぱいいた。ハイタッチしてくれる人とかいると嬉しいなとか思っているとホントにできてくれる、それがアフリカである。景色はもちろん素晴らしい。街と海が一望できる。旅人には当然の選択だろう。帰りはロープウェイである。この日はもう1回同じホテルに行った。あの姉

ちゃんに会うためである。いなかったら、俺の恋はこの日とともに終了。しかし、次の日のチェックアウトの時、いた！おれは、感謝の気持ちをつたえて、HANKYOU。と伝えた。その姉ちゃんは携帯を開きながら会釈した。従業員なのに携帯で遊んでいる。しかし、あの、心配りからして彼女は常識人である。ここではこれが常識なのだ。小さい例を挙げたが、日本の常識は世界では常識ではないということに、1日に5回は出くわす。これが旅にはまる理由である。

## 喜望峰

あの有名なバスコ・ダ・ガマはここを経由してインドを目指したとされている。交通手段は非常に限られているため、俺はツアーに飛び入り参加させてもらった。特別保護区に指定されているためお金を払わないと入れない場所がたくさんあった。全体が国立公園となっていて、建造物はなく、ありのままの大自然が広がっていた。ボルダーズビーチは日本の女性なら絶対人気であろう。ペンギンと触れ合うことができる。なんならペンギンと泳ぐこともできるらしい。間近で見るとあんまりかわいくないペンギンにもいろいろ種類があるらしい。日本の水族館にいるペンギンよりすこしでっかかった気がする。



〈生活〉  
深センでの生活は出発前にも聞いていた通り、全てにおいて圧倒された。以前中国へは、上海や

へきつけ  
私は夏休みの2週間を利用して中国深センにある、日本の中小企業の中国進出を支援するテクノセンターという場所でインターンシップに参加させていただいた。孫安石教授からこのお話を聞いた時に、生活環境の厳しさや治安の悪さを聞いていたので初めは正直迷いもあり、参加を決意するのに時間がかかった。しかし今までの大学生活を振り返ってみて自発的に行動を起こすことがなかったのも、積極的な自分に変える良いきっかけになるのではないかと思ひ参加を決めた。また就職活動を行う上で「働く」ということを、身を持って体験できると思ったからだ。

北京、南京など観光地であり発展した地域に行つたことがあったので、テクノセンターへ近づくにつれ「ここは同じ中国か」と疑ってしまうほど街並みも、衛生的な面でも大きく異なり愕然とした。膨大な量のゴミが至るところに捨てられていて独特な異臭を放ち、全体的に埃っぽく殺伐とした雰囲気包まれている印象を受けた。また治安もかなり悪いようで日本人が鞆を抱きかかえ、静かに目立たないようにしている光景はかなり異様だった。私たちが2週間泊まらせていただいた宿舎は、二段ベッドが6つ並べられていて、ベッドはベニヤ板にゴザを引いただけで、シャワーとトイレは一緒になっていてお湯は出ずに水のみ。洗濯は手洗い。このような環境で暮らすのはもちろん初めてで、かなりのショックだった。この生活が2週間も続くのだと考えたら、早く帰りたくて仕方なかった。しかし一方で隣の部屋のワーカー



部屋のベッド

さんたちが部屋を可愛くお洒落にし、当たり前のように明るく遅くそこで暮らしている姿を目の当たりにして、自分が恥ずかしくなつたと同時に、今まで自分たちがどれだけ恵まれていて何不自由ない生活を送っていたのかを強烈に痛感させられた。自分たちと同年代の女性がどのような環境で、どのように生活しているのかを知り、少しでも同じ環境で共に過ごすことが出来ただけでも大きな収穫であつたと感じる。ワーカーさんとはテレビを一緒に見たり、お互いに何気ない質問をし合ったりしてコミュニケーションをとっていた。

外国語学部  
中国語学科3年

三牧 絵里加

# 忘れられない2週間

次がアフリカ大陸最南端と言われる喜望峰。ただ、地図を見ても分かるが全然最南端じゃない。ただ有名なケープタウンにあり、有名な歴史人物も通つた場所だから有名な場所にしたかったからだとか。ふざけすぎ。理解できません。まあ景色は申し分ない、自分がほんとにちっぽけな存在に見えてくるほどに豪快な大自然。大西洋とインド洋が混ざり合う場所。反対側に日本があると思うとますます不思議な気持ちになつた記憶がある。ただこの場所、突風がハンパない。生えている木が斜めに生えてしまうほど、突風が吹き続けている。あまりたそがれている余裕もないのが現実である。



喜望峰

## IN ナミビア

南アフリカの上に位置する国。ナミビア共和国。あまり知られていない国ではあるが、ここには世界で最も美しいとされているナミブ砂漠が存在する。ナミビアは交通機関が非常に少ない。旅をするならレンタカーを借りるかトラックでツアーするのが一般的である。僕はケープタウンから行

動を共にした3人でレンタカーを借りて出発。人生で一番幸せだと思ひ体験をした。何もない場所を何時間も時速100キロオーバで走る。信号もなくだれにも邪魔されることはない。上に乗って走つたりともうやりたい放題だった。こんな自由は日本では考えられないと思ひつた。

## ナミブ砂漠

首都のウィントフックは相当近代化されている。不自由ない暮らしをすることができた。ただ、交通の便は非常に悪いので、余裕を持った行動が必要だ。

ナミブ砂漠に行くなら午前中に行くことを勧めます。午前の11時ごろには砂が熱くなり滞在困難になる。僕らは旅の疲れかみな寝坊して着いたのが9時30分。1時間も引かないうちに引き返してしまつた。それでも広大な景色に圧倒され表現しきれない自然に大感動した。しかし、ナミビアは夕方からが



ナミブ砂漠

本番である。まず、夕焼けの壮大な景色。これぞアフリカ！といった感じのオレンジ色した綺麗な太陽。暗くなれば空には星しかない。これは絶対に見ておかなければいけない光景だと思ひ。僕は、旅を通して、視野を広げることの大切さを学んだ。世界には思ひもよらない出会いが待ち構えている。これは誰が行つても必ず経験することができるといふか、経験せざるを得ない。なぜなら、1人ではどうすることもできないことが起こるからだ。そして、この出会いは、間違いなく世界が平和になる瞬間である。自国の常識にとらわれすぎて、他国を批判する。自国の非常識が、他国では常識なことがしばしばある。もちろん逆もある。視野を広げることは、平和にもつながると思ひつたとき、旅が好きになつた。